

④ 鷓住居消防団員 前川さんのお話

田中 嘉一
(千葉県済生会習志野病院)



体験を語る前川氏

津波により以前の建物は流されたため、現在は高台まで移設されて遠くに見える常楽寺を背にして、鷓住居の消防団の「前川智克様」のお話を聴きました。優しく穏やかな表情で丁寧にお話されているのですが、その内容は、実に衝撃的なものでした。

「地元消防団として、大地震発生時に閉めることになっていた水門を閉めに海近くまで行った帰りに、津波に飲み込まれてしまいました。回転する水流はすさまじく、流されているうちに意識を失ってしまい、おそらく瓦礫に挟まれたまま山肌まで流されたところで、幸いにも意識を取り戻し、偶然にも数本の竹林の竹につかまり、這い上がって助かりました。黒く濁った水を大量に飲んでしまった感覚があり、身体中には多数の傷があり、呆然としながら変わり果てた街を歩き、偶然見つけた冷蔵庫を開けてみると、1Lのパック牛乳があり、一気に飲みました。泥などの異物を沢山飲んでしまったと思われる中での本能的な行動だったのではと思います。しかし後遺症で現在も片方の耳の聴覚は失われたままです。」

「雪も降る季節、濡れた服はとても冷たく感じました。携帯もない、連絡手段もない、あるのは身一つです。その後3日間飲まず食わずの状態です。救助活動にあたり、かすかに聞こえるうめき声を頼りに、捜索を続けました。臓器が飛び出した状態で、仮の避難所までたどり着いたものの、翌日



前川氏の体験を聞く

には亡くなってしまった方などもいて、それ以上のことがしたくてもできないという繰り返しの、本当に辛い思いをしました。その後も数ヶ月遺体捜索活動にあたり、家族と再会できたのは約2か月後でした。」

「やっとの思いで、別の場所に避難していた家族の情報を入手し、連絡すら取ることが出来なかった家族にやっと会えると足早にたどり着いたところ、震災当日に津波に流されるところを偶然見ていたという子供達は驚いて逃げてしまい、家に入ると自分の遺影があり、感動的な再会どころか自分は幽霊扱いされて大変ショックを受けました。そんなお話を笑い話としてできるのも家族が皆無事であったからだと思います。」

その後も継続的に捜索活動をしながら、街の復興に向けた会議の発足、街の区画整理、地域全体のかさ上げ、前川さんご自身の家の再建築、復興に携わっておられる方々の状況などをお話いただきました。前川さんのお話の時に立っている場所は、1メートル程度地域としてかさ上げされた場所だと聞いて、さらに驚きました。各種制度を最大限活用した補助金で家を再建し、津波で流されてしまった以前の家のローンもあり、二重ローンを抱えているそうです。復興の状況は様々で、再建が済んだ方、これから建てる予定の方、地域を離れてしまった方、区画整理のため元々の場所に家を再建できない方など、復興に要する時間、その苦労をはじめ、様々な問題点についてお話いただきました。

被災体験から復興に関わる現在までの約8年間のお話をうかがい、ずっと前を見続けて力強く歩んでおられる姿に心を打たれました。消防団であるという責任と使命を果たすため、現在に至るまで高いモチベーションを保ちつつ、更に未来を描いて活躍されているお姿に、魂の力強いメッセージを感じました。